

## 自由論題1

### 報告テーマ

建国初期中国の社会主義プロパガンダについての一考察  
政治性と芸術性の狭間にある映画人

A Study on the Socialism Propaganda during the Early Founding Days of PRC

### 氏名(所属)

鄭成(早稲田大学)

ZHENG Cheng ((Waseda University))

### 要旨(800字程度)

本報告は、映画人が抱える創作上のジレンマへの考察を通じて、建国初期の中国共産党が推進するプロパガンダについて、その実態への把握を深めようとするものである。

建国初期、中国共産党は社会主義イデオロギーの普及を図ろうとして、映画、文学、戯曲などの文芸手段を活用し、プロパガンダを展開した。こうした一連のプロパガンダは、中国共産党の公式党史では、ブルジョア的思想の駆除において大きな効果を発揮したとされているが、実際は深刻な問題が存在していた。これらの問題のため、プロパガンダの実施が影響を受け、結果的にプロパガンダの到達点が当初の期待よりずれたことが考えられる。

本報告が取り上げる映画の場合、蔡楚生、史東山、孫瑜らの著名な映画人が直面した政治性と芸術性の両立が創作面の問題として挙げられる。それは、社会主義イデオロギーの宣伝、つまり政治性を優先しようとする、映画作品の芸術性が損なわれ、人を感動させる力を失うことになる。一方、従来の映画作法を取り入れて、芸術性が高い作品を目指そうとしたら、たちまち政治性が低いと紛糾される。当時は、多くの映画人がこうしたジレンマにおかれ、創作の自由が制約されながら、創作を続けていた。彼らが完成した作品は、彼ら自身が目指す理想的な作品とはもちろんのことで、中共が要請するような大衆を教育、感動させる作品とも大きな距離がある。建国初期の映画作品がこのような状況下で製作されたことが、プロパガンダの効果を把握するには重要な意味があるろう。

本報告は、このような政治性と芸術性のジレンマについて、建国初期の政治的文脈のなかでそれがいかに生じたか、映画人がそれをいかに捉えて、対応したかを考察する。利用史料は、映画人らが当時発表した文章、映画政策の関連文書、『内部参考』という刊行物。

報告者は現在、建国初期の国民におけるプロパガンダの教育効果を計る研究を進めている。今回の報告は、その一部となる。